2020/10/1 毎日新聞

右舷灯

東日本大震災での地震と津波で大被害を受けた東北の離島航路の復興ぶりを実際に確かめたくて、9月上旬に宮城県を1週間ほど旅した。新型コロナウィルスの感染防止のために自家用車で回ることにして、名古屋から太平洋フェリーのクルーズフェリーで仙台まで往復し、塩釜、石巻、女川、鮎川などの港町を訪れた。GoToトラベルを活用して意外に安い旅となった。

さて、訪れた各港は、整備された岸壁と町の間には津波に備えた高い防潮堤が造られており、かつての町の様子からは一変していた。しかし、そうした環境の変化の中でも、沿岸の離島への航路は、島民の命を支える使命があり、黙々とその運航を継続している姿に感動した。そして、こうした姿を記録に残しておかねばならないと、改めて思った。

東北の離島航路

宮城県北部には牡鹿半島が太平洋に突き出ており、その先端付近に金華山と網地島が浮かぶ。宗教の島である金華山の住人は、寺の僧職者5名だけで、島を訪れる参拝者のための定期船が女川港と鮎川港から毎週日曜日にでている。一方、一般住民が住む網地島には、石巻港から網地島ラインのカーフェリー「マーメイドⅡ」と高速船「シーキャット」が毎日数便就航している。会社は、昨年創立40周年を迎え、使用船を新造船に代替した。石巻と鮎川の間を、途中で田代島と網地島に寄港しながら結び、カーフェリーは1往復、高速船は3往復している。カーフェリーには小型車3台を積載できる。

この航路の歴史と現状を、安倍社長に伺うことができた。網地島、田代島共に、他の日本の離島と同様に過疎化が進行しており、島民の輸送だけでは経営が成り立たなくなることは目に見えていた。そこで、かなり前から観光客誘致に取り組み、今では島民の利用が1割で、残りの9割が観光客等の島外者となったという。特に、田代島は猫の島として有名になり、観光客が増えている。観光客誘致が離島航路の活性化には必須とわかってはいても、なかなか実現することは難しい。長年の努力によってみごとに成功したことに敬意を表したい。

（池田良穂）